



Photo: Jeffrey Herman

スティーヴ・ライヒ

『スティーヴ・ライヒ〜スペシャル・コンサート』

Steve Reich

Steve Reich - Special Concert

2022.7.30 Sat - 31 Sun

名古屋市芸術創造センター

Nagoya City Performing Arts Center



STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022

1960年代から、多くのクリエイターたち、また聴衆に多大な刺激を与え続ける音楽界の“生ける伝説” スティーヴ・ライヒ。本公演は、あいち2022のコンセプトである「STILL ALIVE 今、を生き抜くアートのちから」に呼応する形で、ライヒ自らの監修によるプログラムとして企画されました。

中世から現代に至る音楽の歴史性、さらにはコンセプチュアル・アートやコンテンポラリー・ダンスなどとも深いつながりのあるライヒ音楽の今日性を、精鋭日本人演奏家による生演奏でぜひ体感していただき、見通しの立ちにくい不確かな今の世を如何に生き抜くか、その希望を皆様と共に見出せますように。

Steve Reich, a living legend of the music world, has been inspiring artists and audiences since the 1960s. This performance has been created under supervision of Steve Reich himself, in response to the Aichi Triennale 2022 motto “STILL ALIVE – The Power of Art to Survive”.

Experience the historicity of music reaching from the Middle Ages to the present day and the contemporaneity of Reich’s music, with its deep connections to conceptual art and contemporary dance, performed live by an orchestra of outstanding Japanese musicians. We wish that this performance will aid to inspire the confidence and hope necessary to survive in today’s unpredictable and uncertain world.

曲目 Program	ピアノ・フェイズ Piano Phase (1967)
	ヴァーモント・カウンターポイント Vermont Counterpoint (1982)
	ディファレント・トレインズ Different Trains (1988)
	— 休憩 15分 —
	エレクトリック・カウンターポイント Electric Counterpoint (1987)
	ダブル・セクステット Double Sextet (2007)
	上演時間 約120分 (休憩含む)



Photo: Wonge Bergmann

スティーヴ・ライヒ

1936年ニューヨーク (米国) 生まれ
ニューヨーク (米国) 拠点

コーネル大学哲学科、ジュリアード音楽院で学び、ルチアーノ・ベリオ、ダリウス・ミヨーらに師事したミルズ・カレッジにて音楽博士号を取得。1965年テープ作品《イツ・ゴナ・レイン》、1966年《カム・アウト》発表。以来、旺盛な作曲活動、さらに世界各国で演奏活動を行う。1991年「スティーヴ・ライヒ・アンド・ミュージシャンズ」として初来日。1997年には、ユダヤ教／キリスト教／イスラム教の複雑な関係をテーマに据えた『ザ・ケイヴ』を映像作家のベリル・コロットと制作し、東京でも公演を行った。2008年には「コンポージウム」のテーマ作曲家として再来日し、アンサンブル・モデルンらと自作を多数上演。音楽というジャンルを超え、広くアート界にインスピレーションを与え続ける作曲家である。

Steve Reich

Born 1936 in NY, US
Based in NY, US

Steve Reich studied at Cornell University’s Department of Philosophy, Juilliard School of Music, and received his doctorate in music from Mills College, where he studied with Luciano Berio, Darius Milhaud. In 1965 and 1966 respectively, Reich released the tape music pieces *It’s Gonna Rain* and *Come Out*. Since then, he has continued to create music and perform around the world.

His first visit to Japan was in 1991 with his band “Steve Reich and Musicians.” In 1997, together with video artist Beryl Korot, Reich created the multimedia opera *The Cave* about the complex relationship between Judaism, Christianity and Islam. The piece was also performed in Tokyo.

In 2008, he visited Japan once again as the featured composer of the Tokyo Opera City’s “Composium 2008” and performed many of his own works with the Ensemble Modern.

Steve Reich is an exceptional composer who continues to inspire and stimulate a wide range of artists in and outside of the medium of music.

主な受賞歴

2009 《ダブル・セクステット》ピューリッツァー賞 (米国)、音楽部門受賞
2006 第18回高松宮殿下記念世界文化賞、音楽部門受賞
1990 《ディファレント・トレインズ》
グラミー賞 (米国)、最優秀コンテンポラリー・ミュージック賞受賞

Selected Awards

2009 Pulitzer Prize for Music for *Double Sextet*, USA
2006 18th Praemium Imperiale Arts Award for Music, Japan
1990 Grammy Award for Best Classical Contemporary Composition for *Different Trains*, Grammy Awards, USA

曲目解説（自作解説）

Composer's note

ピアノ・フェイズ

Piano Phase (1967)

生演奏の楽曲を作曲したいという考えは、《カム・アウト》(1966)を完成させたすぐ後から浮かんでいた。しかしテープレコーダーで発見され、テープレコーダー固有のものと思われていた位相シフトの響きを、人間の手で再現することは到底不可能に思えた。その一方で、生演奏のミュージシャンと共演するのであれば、位相シフトの響きほど面白いものはないだろうとも思った。1966年の暮れに、ピアノで弾いた短いメロディーの繰り返しを録音し、そのループ再生に対して、あたかも自分ももう一台のテープレコーダーであるかのように演奏してみた。すると驚いたことに、機械の完成度には遠く及ばないものの、それに近い響きで、しかも楽譜を読む必要もなく、ひたすら聴くことに没頭しながら演奏

するという、新しく、非常に満足のいく体験ができたのだ。その後《ピアノ・フェイズ》は完全に楽譜化され、ある小節と次の小節の間に点線が引かれ、徐々に位相がずれていくことが示されるようになった。楽譜を見ると、2人の奏者がユニゾンで同じパターンを繰り返し演奏し始め、片方がじっとしている間に、もう片方が徐々にテンポを上げ、ゆっくりと1拍先に進んでいることがわかる。このプロセスを2人がユニゾンに戻るまで繰り返し、戻った時点でまたパターンを変え、再度フェイジングを始める。すべてが計算し尽くされ、即興性はない。しかしパフォーマンスにおける心理、演奏の間に起きていることは、音への完全なる没頭であり、完全なる感覚的な知的関与なのだ。

ヴァーモント・カウンターポイント

Vermont Counterpoint (1982)

《ヴァーモント・カウンターポイント》は、フルート奏者のランサム・ウィルソンに委嘱され、ベティ・フリーマンに捧げた楽曲。アルトフルート3本、フルート3本、ピッコロ3本、テープに録音済みのソロパート1本、そして生演奏のソロパートのために書かれた楽曲で、ソリストはアルトフルート、フルート、ピッコロを生演奏しながら進行中の対位法に参加したり、より拡張されたメロディーを演奏したりする。11人のフルート奏者で演奏することも可能ではあるものの、基本的には「テープ再生」と「生演奏のソロ」で演奏されることを意図してつくられた楽曲。演奏時間はおよそ10分。その比較的短い時間内に、それぞれに調が異なる4つのセクションが展開され、そのうちの3つめはゆっくりとしたテンポとな

る。作曲技法としては、休符に音符を置き換えてつくられる短い繰り返しのメロディーパターンの中にカノンが構築されていて、それらの組み合わせで生じるメロディーが演奏される。メロディーやメロディーパターンが生まれたところで、網のような対位法の周辺パートがフェードアウトしていくため、そのメロディーは次のセクションの基礎となる。私が1967年時点で発見していた技法のいくつかが採用されている楽曲ではあるものの、比較的速めに曲が変化すること（3回以上繰り返される小節はほとんどない）、ゆっくりなテンポへの機械的な緩急があること、比較的速く変調していくことなどに起因し、他の作品に比べてより集中的で簡潔な印象が持たれることもある。

ディファレント・トレインズ

Different Trains (1988)

弦楽四重奏による生演奏と事前録音されたテープで構成される《ディファレント・トレインズ》は、初期のテープ作品《イツツ・ゴナ・レイン》(1965)と《カム・アウト》(1966)をルーツに、新たに編み出した作曲手法を用いた作品である。基盤となったアイデアは、話し声を録音したデータから慎重に選び取られた音声を用いて、楽器演奏のための譜面をつくるというもの。これは私自身の幼少期の経験から着想を得ている。私が1歳の時、両親は離婚した。母はロサンゼルスに引っ越し、父はニューヨークに残った。両親ともに親権を持っていたため、1939年から1942年まで私は、家庭教師に連れられてニューヨークとロサンゼルスを汽車で行ったり来たりする生活を送っていた。当時の私はそんな汽車での移動を刺激的でロマン溢れる旅として楽しんでしたが、今振り返れば、ユダヤ人である私があたの時代にヨーロッパにいたならば、まったく違う汽車に乗っていたことであろう。これを踏まえて、私を取り巻く状況のすべてを正確に映し出した作品を作りたいと考え、以下の方法で音声テープを制作した。

1. 家庭教師のヴァージニア（制作時70代）が、私と一緒に汽車に乗った時の思い出話をする様子を録音する。
2. ニューヨークとロサンゼルスをつなぐ寝台車でポーターとして働いていたローレンス・デイヴィス（制作時80代）が、自身の人生について語る様子を録音する。
3. ホロコーストの生存者であるラシェラ、ポール、レイチェル（三者とも私と同年代で、制作時はアメリカ在住）が当時の体験について語った録音素材を集める。

4. 1930～40年代にアメリカとヨーロッパで録音された汽車の音の素材を集める。

テープに録音された話し声と弦楽器を組み合わせるために、話し声中でも音程がはっきりしていそうな部分を短いサンプルとして抜き取り、可能な限り正確に譜面に書き起こした。

その後、できあがった話し声の旋律を模倣するように弦楽器が演奏。音声サンプルと汽車の音も、サンプリングキーボードとコンピューターを使ってテープに録音した。別々に録音された異なる3つの弦楽四重奏も録音テープに加えられ、最後にパフォーマンスで4つ目の弦楽四重奏の生演奏が加わることで、作品が完成する。

《ディファレント・トレインズ》は三楽章構成としているが、各章内で頻繁にテンポが変わるため、ここでは楽章という言葉も拡大解釈している（各章間は休止を挟まない）。各楽章のタイトルは以下の通り。

1. アメリカー 第二次世界大戦前
2. ヨーロッパー 第二次世界大戦中
3. 第二次世界大戦後

本作では、ドキュメンタリー性と音楽の生演奏の両方のリアリティを提示することで、新しい音楽の方向性を指し示した。ここで示した方向性をきっかけに、ドキュメンタリー要素を持つミュージックビデオのパフォーマンスが近い将来生まれることを期待している。

*音声の内容については8-9P参照

エレクトリック・カウンターポイント

Electric Counterpoint (1987)

《エレクトリック・カウンターポイント》は、ブルックリン音楽アカデミーのネクスト・ウェーブ・フェスティバルから委嘱を受け、ギタリストのパット・メセニーのためにつくられた楽曲。作曲は1987年夏。演奏時間は約15分。録音再生されたテープに対しソリストが生演奏するというスタイルは、フルート奏者ランサム・ウィルソンのために1982年に作曲された《ヴァーモント・カウンターポイント》やクラリネット奏者リチャード・ストルツマンのために1985年に作曲された《ニューヨーク・カウンターポイント》などの一連の作品の3作目にあたる。《エレクトリック・カウンターポイント》では、ソリストはギターパート10本とベースパート2本を事前に録音し、最後の11本目のギターとして、再生された録音と共に生演奏する。パット・メセニーは、ギター独自の表現を追求することで、いかに楽曲が進化するかを教えてくれた。

《エレクトリック・カウンターポイント》は「はやく」「ゆっくりと」「はやく」という3つの楽章を、休止を挟まずに続けて演奏する構成。第一楽章では、脈打つように繰り返される導入部分でその章全体を構成するハーモニーを提示した後、主題となる旋律が登場する。この旋律は、民族音楽学者のシムハ・アロム氏を通じて知った、角笛で奏でられるアフリカ中部の音楽から着想を得た。

主旋律は8声のカノンから成り、2本のギターとベースが脈打つハーモニーを奏でる中、ソリストは8本のギターが録音再生されるなかで連動する対旋律から生まれたメロディーパターンを弾く。

第二楽章ではテンポが半分になり、

調を変えて新しい主題を提示すると、次第にゆっくりと9本のギターによるカノンへと発展していく。この楽章でもまた2本のギターとベースによるハーモニーにのせて、主旋律と対旋律から生まれたメロディーパターンをソリストが奏でる。

第三楽章では元のテンポと調に戻り、新たな3拍子のパターンが登場する。4本のギターによるカノンが続いた後、突然2本のベースが加わることで3拍子のリズムがさらに強調される。そしてソリストが新たなコード進行で弾き始めると、3本のギターのカノンへと発展する。これらが出揃うと、ソリストが先ほどのメロディーパターンへと戻るが、突然ベースが異なる調と拍子を提示する。調はホ短調とハ短調、拍子は3/2拍子と12/8拍子の間で転換を繰り返し、8分音符4つのフレーズが3回聞こえた直後、8分音符3つのフレーズが4回聞こえてくる。この拍子と調の変化は曲の終盤に向かうにつれてどんどん加速していき、最後にベース2本が徐々にフェードアウトすると、12/8拍子とホ短調で不安定感がようやく解消される。

ダブル・セクステット

Double Sextet (2007)

《ダブル・セクステット》は、同じ楽器編成の2つの6重奏グループにより演奏される。各グループはフルート、クラリネット、ヴィブラフォン、ピアノ、ヴァイオリン、チェロで編成されている。楽器演奏を二重にしたのは、私の初期作品の多くがそうであったように、2つの同じ楽器が連動して1つの大きな流れを作り出すためである。例えばこの作品では、ピアノとヴィブラフォンがリズムカルに連動することで、アンサンブルを牽引しているかのように聴こえるだろう。

本作は、12人で生演奏するパターン、もしくは事前に録音した6重奏の音源を相手に同じ6人が生演奏をするという2つの演奏方法がある。

1人の奏者が自身の音源を相手に演奏するというアイデアは1967年の《ヴァイオリン・フェイス》から始まり、その後《ヴァーモント・カウンターポイント》(1982)、《ニューヨーク・カウンターポイント》(1985)、《チェロ・カウンターポイント》(2003)へと続いていく。さらに《ディファレント・トレインズ》(1988)ではこのアイデアを初めて室内楽のアンサンブル編成へと拡張させ、《トリプル・クアルテット》(1999)を経て本作《ダブル・セクステット》に至る。アンサンブル編成を二重にすることで、対になった各楽器が複数の旋律の網を展開していき、対位法の新たな可能性を提示する。弦楽器のみで構成された《ディファレント・トレインズ》と《トリプル・クアルテット》は、各パートの弦一本一本でひとつの大き

な布を織るような作品。対して《ダブル・セクステット》は打楽器、弦楽器、管楽器の全6種のパートが対になり連動することで、より多彩な音色を響かせる。

本作は「はやく」「ゆっくりと」「はやく」の三楽章で構成され、各楽章内にはD、F、Ab、Bの調、もしくは相対する短調のB、D、F、G#という4つの和声セクションが組まれている。私の作る音楽のほとんどがそうであるように、本作でも急な転調を行うことで各セクションの切り替わりを明解にしている。

《ダブル・セクステット》は約22分の楽曲で、2007年10月に完成。エイス・ブラックバードの委嘱により制作し、2008年3月26日、同グループにより、バージニア州リッチモンド大学にて世界で初めて演奏された。

《ディファレント・トレインズ》音声より

1 America - Before the War

from Chicago to New York (Virginia)
one of the fastest trains
the crack train from New York (Mr. Davis)
from New York to Los Angeles
different trains every time (Virginia)
from Chicago to New York
in 1939
1939 (Mr. Davis)
1940
1941
1941 I guess it must've been (Virginia)

2 Europe - During the War

1940 (Rachella)
on my birthday
The Germans walked in
walked into Holland
Germans invaded Hungary (Paul)
I was in second grade
I had a teacher
a very tall man, his hair was concretely plastered smooth
He said, "Black Crows invaded our country many years ago"
and he pointed right at me
No more school (Rachel)
You must go away
and she said "Quick, go!" (Rachella)
and he said, "Don't breathe!"
into those cattle wagons (Rachella)
for 4 days and 4 nights
and then we went through these strange sounding names
Polish names
Lots of cattle wagons there
They were loaded with people
They shaved us
They tattooed a number on our arm
Flames going up to the sky—it was smoking

アメリカ — 第二次世界大戦前

シカゴからニューヨークに向かう（ヴァージニア）
一番早く到着する列車だった
ニューヨーク発の豪華特急列車さ（Mr. デイヴィス）
ニューヨーク発ロサンゼルス行き
毎回、違う列車だったわ（ヴァージニア）
シカゴ発ニューヨーク行き
1939年に
1939年（Mr. デイヴィス）
1940年
1941年
1941年のことだったはず（ヴァージニア）

ヨーロッパ — 第二次世界大戦中

1940年（ラシェラ）
私の誕生日に
ドイツ軍が来た
オランダに進軍した
ハンガリーに侵攻した（ポール）
僕は2年生だった
僕の先生は
とても背が高くて、髪をべったりとなでつけていた
彼は言った。「黒いカラスどもが我が国に入り込んでいた。何年も前からだ」
そして先生は僕を指さした
もう学校はなかった（レイチェル）
出て行きなさい
そして彼女は言った。「早く、行って!」と（ラシェラ）
そして彼は「休むんじゃない!」と言った。
家畜用の列車に入れられた（ラシェラ）
4日4晩の間
それから、耳慣れない地名がいくつも通り過ぎていった
ポーランドの地名だった
家畜用の運搬列車はたくさんあって
人々がそこに詰め込まれた
彼らは、私たちの髪を剃り
腕に番号を入れ墨した
炎が空に立ち昇り……煙が上がっていた

3 After the War

and the war was over (Paul)
Are you sure? (Rachella)
The war is over
going to America
to Los Angeles
to New York
form New York to Los Angeles (Mr. Davis)
one of the fastest trains (Virginia)
but today, they're all gone (Mr. Davis)
There was one girl, who had a beautiful voice (Rachella)
and they loved to listen to the singing, the Germans
and when she stopped singing they said, "More, more",
and they applauded
"More, more"

第二次世界大戦後

そして、戦争は終わった（ポール）
本当なの？（ラシェラ）
戦争が終わったって
アメリカに行くつもり
ロサンゼルスに
ニューヨークに
ニューヨーク発ロサンゼルス行きだ（Mr. デイヴィス）
一番早く到着する列車よ（ヴァージニア）
だけど今は、みんないってしまった（Mr. デイヴィス）
一人の女の子がいたわ　きれいな声だった（ラシェラ）
そして、彼女の歌を聞いたがったのよ、ドイツ人たちがね
歌うのをやめると、彼らは言ったわ、「もっとだ、もっと」って
そして拍手喝采したんだわ
「もっとだ、もっと」って

出演者

Performers



中川賢一 (ピアノ)
Nakagawa Ken'ichi (Piano)

桐朋学園大学音楽学部でピアノと指揮を学び、アントワープ音楽院(ベルギー)ピアノ科を首席修了。1997年ガウデアムス国際現代音楽コンクール(オランダ)第3位。帰国後はソロ、室内楽、指揮で活躍、国内外のさまざまな音楽祭にも出演する。NHK-FM、NHK-BSプレミアムクラシック倶楽部などに出演、新曲初演多数。メシアン、武満徹のピアノ曲の全曲演奏のほか、ケージ「ソナタとインターリュード」、ジェフスキー「不屈の民変奏曲」、フェラーリのピアノ作品を演奏し好評を博す。「アンサンブル・ノマド」メンバー。お茶の水女子大学、桐朋学園大学非常勤講師。



石上真由子 (ヴァイオリン)
Ishigami Mayuko (Violin)

日本音楽コンクール等、国内外のコンクールで優勝・受賞多数。NHKクラシック音楽館、題名のない音楽会、NHK-FM名曲リサイタルやリサイタル・ノヴァ、ブラボー!オーケストラ等に出演。東京都響、読響、東京響、日本フィル、関西フィル、大阪フィル、大阪響、京響、ブラシヨフ国立交響楽団、セントラル愛知など、国内外で多数のオーケストラと共演。海外の音楽祭にも多数出演。京都市芸術新人賞、音楽クリティック・クラブ賞 奨励賞、大阪文化祭奨励賞、青山賞受賞。日本コロムビアより「ヤナーチェク:ヴァイオリン・ソナタ」「ブラームス:ピアノとヴァイオリンのためのソナタ第1番」発売中。



早田 類 (ヴィオラ)
Wasada Rui (Viola)

東京藝術大学音楽学部卒業後、ヴィオラに転向。同大学大学院音楽研究科在学中に渡仏。パリ地方国立高等音楽院第3課程修了後、ローザンヌ高等音楽院にてソリストディプロム取得。在学中、Max Jost/財団より奨学金を授与される。2004年から10年間、スペインのマドリッド王立歌劇場(レアル劇場)管弦楽団にて副首席奏者を務める。2016年より大阪交響楽団首席ヴィオラ奏者。兎東俊之、菅沼準二、市坪俊彦、ブリュノ・パスキエに師事。



若林かをり (フルート)
Wakabayashi Kaori (Flute)

東京藝術大学音楽学部卒業。ストラスブール音楽院(フランス)、スヴィツェラ・イタリアーナ音楽院(スイス)修了。修了論文は『日本文化—時間と空間の総括概念である“間”が、ヨーロッパの現代音楽にもたらした影響について』。第72回文化庁芸術祭賞 音楽部門 新人賞、現代音楽演奏コンクール“競楽X”第2位ほか受賞多数。2017年文化庁新進芸術家海外研修員。NHK-BSプレミアムクラシック倶楽部、NHK-FM名曲リサイタル、現代の音楽などに出演。コジマ録音よりCDサルヴァトーレ・シャリーノ作曲フルート独奏のための作品集「Lux in Tenebris / 闇の中の光」をリリース。



島田真千子 (ヴァイオリン)
Shimada Machiko (Violin)

東京藝術大学を首席で卒業後、デトモルト音楽大学院(ドイツ)を最優秀で卒業。日本音楽コンクール2位、バガニーニ国際、J.Sバハ国際コンクールなどで入賞、愛知県芸術文化選奨文化賞、名古屋市芸術奨励賞を受賞。これまでCD「バハ無伴奏ソナタ&バルティータ集」ほかをリリース。現在、セントラル愛知交響楽団ソロコンサートマスター。水戸室内管弦楽団、サイトウキネンオーケストラやヴェリタス弦楽四重奏団のメンバーとしても活躍している。愛知県立芸術大学および京都堀川音楽高校の非常勤講師。使用楽器はNPO法人イエローエンジェルより貸与されているG.B ガダニーニ(1769年)。



福富祥子 (チェロ)
Fukutomi Shoko (Cello)

東京藝術大学大学院修了。ベルリン芸術大学を修了し国家演奏家資格を取得。ローマ国際音楽コンクール第1位、ヨーロッパ国際音楽コンクールデュオ部門最高位など、受賞多数。ソロ、室内楽の分野で積極的な活動を行うほか、東京藝術大学大学院博士後期課程では「演奏家の心身の調和」についての研究で2009年博士号(音楽)を取得。「アンサンブル九条山」メンバー、東京藝術大学非常勤講師。



山田 岳 (エレクトリックギター)
Yamada Gaku (Electric guitar)

中学生のときジミ・ヘンドリクスに憧れギターを始める。その後ブルースやヘヴィメタル、プログレ、クラシック、古楽などに傾倒。ギターを用いた(あるいは用いない)あらゆるパフォーマンスを活動の核とする。第9回現代音楽演奏コンクール“競楽IX”第1位。第20回朝日現代音楽賞を受賞。2ndアルバム「melodia」が第75回文化庁芸術祭レコード部門にて優秀賞を受賞。ソプラノの太田真紀と共に主催・主演を務めたオペラ『ロミオがジュリエット』(作曲:足立智美)が第76回文化庁芸術祭音楽部門にて大賞を受賞。



畑中明香 (ヴィブラフォン)
Hatanaka Asuka (Vibraphone)

同志社女子大学音楽学科及び専修課程修了。日本打楽器協会新人演奏会にて最優秀賞、朝日現代音楽コンクール“競楽IV”第2位入賞。ドイツ国立カールスルーエ音楽大学を最優秀で卒業後、アンサンブル・モデルン(ドイツ)のアカデミーメンバーとして研鑽を積む。2006年ダルムシュタット国際現代音楽祭(ドイツ)にてクラニヒシュタイナー音楽賞受賞。現在は関西を中心に演奏活動が続いている。「アンサンブル九条山」、パーカッションアンサンブル「シュレーゲル」、「アンサンブルMP4」のメンバー。相愛大学非常勤講師。2021年「マリンバ教室京都 四条烏丸」を開講。



上田 希 (クラリネット)
Ueda Nozomi (Clarinet)

大阪音楽大学卒、ジュリアード音楽院修士課程修了。第68回日本音楽コンクール第1位、第5回松方ホール音楽賞等受賞多数。ソリストとして東京交響楽団、アンサンブル金沢、京都市交響楽団、大阪フィルハーモニー管弦楽団他と共演。「next mushroom promotion」、「いずみシンフォニエッタ大阪」メンバー。ヴェネツィア・ビエンナーレ(イタリア)、サントリーサマーフェスティバル(東京)など国内外の音楽祭にも招かれる。現在、大阪音楽大学・京都市立芸術大学・同志社女子大学非常勤講師。



有馬純寿 (エレクトロニクス)
Arima Sumihisa (Electronics)

1965年生まれ。エレクトロニクスやコンピュータを用いた音響表現を中心に、現代音楽、即興演奏などジャンルを横断する活動を展開。これまでに数多くの演奏会で電子音響の演奏や音響技術を手がけ、高い評価を得ている。第63回芸術選奨文部科学大臣新人賞芸術振興部門受賞のほか、秋吉台国際芸術村「ベルセポリス」ソリスト、「東京シンフォニエッタ」、「東京現音計画」のメンバーとして、サントリー芸術財団佐治敬三賞受賞。国内外の実験的音楽家とのセッションや、美術家とのコラボレーションも多い。帝塚山学院大学リベラルアーツ学科准教授、東京音楽大学大学院特任教授、京都市立芸術大学非常勤講師。

出演：中川賢一（ピアノ）
若林かをり（フルート）*
石上真由子（ヴァイオリン）*
島田真千子（ヴァイオリン）
早田頌（ヴィオラ）
福富祥子（チェロ）*
山田岳（エレクトリックギター）
上田希（クラリネット）*
畑中明香（ヴィブラフォン）*
有馬純寿（エレクトロニクス）
* アンサンブル九条山

Performers: Nakagawa Ken'ichi (Piano)
Wakabayashi Kaori (Flute)*
Ishigami Mayuko (Violin)*
Shimada Machiko (Violin)
Wasada Rui (Viola)
Fukutomi Shoko (Cello)*
Yamada Gaku (Electric guitar)
Ueda Nozomi (Clarinet)*
Hatanaka Asuka (Vibraphone)*
Arima Sumihisa (Electronics)
*= Ensemble Kujoyama

監修：スティーヴ・ライヒ

Supervisor: Steve Reich

舞台監督：串本和也 (RYU)
照明：森下泰 (ライトシップ)
音響：有馬純寿

Stage Manager: Kushimoto Kazuya (RYU)
Lighting Design: Morishita Tai (Light Ship)
Sound Design: Arima Sumihisa

演奏家マネージメント：北山絵美 (アーティフィニティ)

Performer's management: Kitayama Emi (Artiffinity Co., Ltd.)

記録映像：株式会社青空
記録写真：今井隆之

Video Documentation: AOZORA, LTD.
Photography: Imai Takayuki

パフォーミングアーツ・アドバイザー：前田圭蔵 (国際芸術祭「あいち2022」)
制作：村松里実 (国際芸術祭「あいち2022」)

Performing Arts Adviser: Maeda Keizo (Aichi Triennale 2022)
Production Coordinator: Muramatsu Satomi (Aichi Triennale 2022)

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会
共催：愛知県芸術劇場
協力：公益財団法人名古屋市文化振興事業団 [名古屋芸術創造センター]

Presented by Aichi Triennale Organizing Committee
Co-Presented by Aichi Prefectural Art Theater
In Cooperation with Nagoya City Performing Arts Center

文化庁「ARTS for the future! 2」補助対象事業

STILL ALIVE 国際芸術祭 あいち2022



国際芸術祭「あいち2022」 パフォーミングアーツ

アドバイザー：藤井明子、前田圭蔵
キュレーター：相馬千秋

プロダクションマネージャー：清水翼
コーディネーター：村松里実、谷口裕子、芝田暹、菅井一輝

テクニカル・コーディネーター：尾崎聡

票券：小森あや (bench Co.)

翻訳：ロバート・ツェツシェ
編集：鈴木理映子
デザイン：山口良太

▶ PAチャンネル



詳しくはこちら

各作品の背景についてのレクチャー、
参加アーティストによるトークなど、
パフォーミングアーツ・プログラムを
多面的に体験するためのオンライン・
コンテンツです。

AICHI TRIENNALE 2022 Performing Arts

Adviser: Fujii Akiko, Maeda Keizo
Curator: Soma Chiaki

Production Manager: Shimizu Tsubasa
Coordinator: Muramatsu Satomi, Taniguchi Yuko
Shibata Haruka, Sugai Kazuki
Technical Coordinator: Ozaki So

Ticket Administration: Comori Aya (bench Co.)

Translation: Robert Zetzsche
Editor: Suzuki Rieko
Designer: Yamaguchi Ryota

2022年7月30日|土|— 10月10日|月・祝|[73日間]

芸術監督：片岡 真実 (森美術館館長、国際美術館会議 (CIMAM) 会長)

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会
助成：一般財団法人地域創造
愛知県政150周年記念事業



AICHI TRIENNALE 2022: STILL ALIVE

July 30 (Saturday) to October 10 (Monday, public holiday), 2022
Artistic Director: Kataoka Mami (Director, Mori Art Museum/President, CIMAM)
Organized by Aichi Triennale Organizing Committee
Supported by Japan Foundation for Regional Art-Activities